
スナオなキモチ

モロッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スナオナキモチ

【Nコード】

N67170

【作者名】

モロツコ

【あらすじ】

なんとというか、なんか凄いことになってしまいました(汗) オオカミさんシリーズで涼子×亮士です。まあ見てください。涼子さん目線で書いています。駄文ですが、見てください。

(前書き)

読み直して恥ずかしくてオーバーヒートしかけました。
涼子さんの毛皮がはがれる瞬間を書きたかったのに… (泣)

よければ見てください。

まあ駄文かとは思いますが。

「いやあ、これで一件落着？」

頭取が一つの歓声を上げた。

それにつられて、他のメンバーも頷く。

アリス先輩、魔女先輩、おつう先輩、浦島に乙姫さん、りんごも頷いてくれた。

今日、この日。

羊飼が司る鬼ヶ島高校に、一喝を入れた。

一喝と言っても、羊飼にこれ以上は被害を増幅させるなど反省させ、謝罪文を言ってもらったというわけだが。

それだけでも、できてよかった。

でも、その謝罪文一言で私の昔の傷は癒えなかった。

癒えるはずもないけど。

羊飼のおかげで今だって素直になれない自分が心を支配して。

この嘘の毛皮を、ボロボロになってもつけないと不安な自分がいてこの毛皮を剥いで、みんなが遠くなってしまうたら、裏切られてしまったらと思うと。

何もできなくなってしまう、怖くて今のままから抜け出せない。

みんなには申し訳ないと思う。

りんごたちにも、頭取たちにも。

そして、亮士にも。

アイツは自分のことを好きと言ってくれた。

ただ純粹に、自分の心の内を見抜いて、この毛皮を一生懸命にかぶってごまかして。

でもその中で頑張っている自分に、心惹かれたと言っていた。

でも、私は男が怖くて、羊飼と同じ目にあっってしまうと思うと、怖くて仕方なくて。

本当に、亮士には申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

そんなとき、亮士は羊飼にこう言ったんだ。

「涼子に謝れ。」

あのとき、全部が救われた気がした。

話しかけたくもなくて、話したらきつと昔のことを思い出してしまう気がして。

亮士の後ろで、ずっと震えていたからきつと心を察してくれたのかもしれない。

「…すまん。」

あの羊飼が、謝った。

でも心から許したわけじゃないけれど。

あの時ばかりは、少し許すことができた。

でも、まだ心は渡せない。

この毛皮をはがす時、私は私でなくなってしまう気がして。

「涼子さん。」

「…ん？」

突然話しかけられ、話半分のから返事をしてしまった。

びっくりしたけど、亮士はいつもの優しい瞳でこちらを見ていた。いつもの亮士じゃなくて、何か決心ついたような、そんな瞳。気が付くと、周りには誰もいなくて、私と亮士の二人だけだった。

「もう、大丈夫ツスよ。」

「な、何がだよ。」

「もう、怖がらなくて大丈夫ってことツス。」

「何に怖がるんだよ。」

羊飼もいなくなったし、オレが怖がることなんて…」

「ほら、震えてる。」

ぎゅっと、気が付かないうちに私の両手をしっかりと離さないように握っていた。

「っ!」

「まだ、怖いんじゃないツスか？」

「お、オレは…」

「男が怖いっていうトラウマは、一生消えないかもしれないツス。けど、俺は涼子さんを傷つけるようなことは絶対にしないツスから。」

「
亮士は私のことを、これでもかって言うくらいに力で抱きしめた。

「俺の前では、素直な涼子さんでいてくれないッスか？」

「で、でも…」

「俺は涼子さんがその毛皮をはずして、弱くなってしまったら、俺が隣で支えてやるッス。」

「こんながあつても、俺がいつでも盾になって守るッス。」

『もう、涼子さんは一人じゃないッスから』

その一言が、私の心を隠していた毛皮をそっと、優しくはがしてくれた。

「り、亮士…」

「大丈夫だから。」

俺はあいつとは違って、絶対裏切ったりしないから。」

「絶対…だからね…」

約束…破ったら許さないから…」

「約束は守るためにあるんだろ？守って見せるさ。」

「…ありがとう、亮士」

今まで以上に抱きしめられ、苦しいはずなのに嬉しくて。

ああ、隣に君がいるんだと、ちゃんと感じられて。気が付かないうちに、涙を溜めていた瞳から大粒で嬉しい涙があふれてきた。

私はきつと、あの言葉が欲しかったんだと思った。

いつもヘタレで、頼りなくて、一緒にいないと危なっかしくて。でもいざっていう時にいつも頼りになって、私のことを一番に考えてくれる。

そんな彼に、いつのまにか惹かれていたのかもしれない。でも、いつも毛皮がその気持ちを隠して、素直になれなかった。その毛皮すらも、そっと優しくはがしてくれて、素直にさせてくれた君。

あの時、君に逢えて、本当によかった。

「改めて言わせてもらっス。」

「大神涼子さん、俺はあなたのことを心の底から愛しています。」

「私も言わせてもらっね。」

「森野亮士君、私はあなたのことが大好きです。」

こんな私でよければ、喜んで。」

そして、私達は離れないようにと、約束した。

まだ早いけど、仮の誓いのキスとして

いつか、君と本当の誓いのキスができる日を、そっと待ちわびている。

そんな日も、そう遠くはないかもしれないけど

これからも、ずっと私の側にいてください。

世界一大好きな、森野亮士へ。

あなたのことを世界一愛している、大神涼子より。

(後書き)

どうでしたか？

作者は書いてて恥ずかしかったです、皆さんはどうでしたか？
何か感想とかがありましたら、よろしく願います<>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6717o/>

スナオなキモチ

2010年11月3日01時47分発行